

八重山群雄割拠時代の波照間島における村落と英雄

通 事 孝 作

はじめに

日本列島の有人島で最南端に位置する波照間島は、八重山で最古の下田原貝塚、それに大泊浜貝塚など数多くの史跡が残っている。下田原城跡、伝マシユク村跡遺跡、伝ヤグ村跡遺跡、伝ミシユク村跡遺跡、伝ペーミシユク村跡遺跡、伝シムス村跡遺跡などである。これらの遺跡には村の有力者が居住していたと伝わるが、遺跡は古文書にはまったく登場せず、ただ伝説だけが残っているのみである。先の遺跡から多量の外来陶磁器が出土していることから考古学研究者は、これらの遺跡を八重山先史時代の編年として第三期に位置づける。つまり、13世紀から15世紀の史跡だということである。

稲村賢敷氏は昭和30年代に波照間島の史跡を調査したが、この時、外来陶磁器に着目した同氏は伝ヤグ村跡遺跡をヤグ村旧跡、下田原城跡をシモタ原城跡、伝シムス村跡遺跡をシムシ部落旧跡と名づけ、倭寇にかかわる史跡として持論を展開している^{註①}。これらの遺跡は果たして、「倭寇遺跡」と規定していいのか。これについては過去に深く追究した事例はほとんど見当たらない。文献史学の見地からは、これらの史跡に対応する時期は、八重山において一般的に「英雄時代」といわれる。

八重山の「英雄時代」とは、どういう時代で、どのような特色があるのだろうか。「英雄時代」に相当する遺跡から、外来陶磁器が出土していることから、海外貿易が隆盛を極め、農耕文化が定着していた時代であろうことは推測できる。農耕文化が一段と高揚した背景には鉄器の移入と普及は見逃せない。鉄器は生産活動を活発にし、階級社会を生み出す誘因ともなり、地域社会を大きく進展させた。

古文書と伝説から15世紀中期から16世紀初期にかけての八重山においては、各島じまに群雄が割拠し、覇権を競っていたことが分かる。西表島の慶来慶田城用緒、石垣島の平久保加那按司（平久保）、仲間満慶山英極（川平）、オヤケ・アカハチ（大浜）、長田大主（石垣）、波照間島の明宇底獅子嘉殿、与那国島のサンアイ・イソバなどである。

これら7人の中でも琉球王府に反旗を翻し、死亡したオヤケ・アカハチ、琉球王府の忠臣としてアカハチと対立した長田大主、獅子嘉殿を含めた3人は、15世紀末の八重山を駆け抜けた中心人物として、いずれも波照間島出身である。「英雄時代」の八重山を動かした主要人物がどうして、石垣島や西表島から離れた孤島の波照間島で生れたのだろうか。島には3人が活躍する時期の前後に、ゲートウ・ホーラ、ウヤマシ・アガダナも輩出してお

り、彼らは民衆の尊奉を集めていたといわれる。

本稿では先史時代の波照間島を概略的にみた後、「中山入貢」後に古文書に登場する八重山、波照間島、それに群雄割拠時代の八重山、波照間島の時代的特色、波照間島の英雄たち、倭寇と英雄たちとの関係などにスポットをあてて、考古学資料や古文書、島に残る伝説をひも解きながら考えていきたい。

1、先史時代の波照間島

八重山で最古といわれる史跡が波照間島にある。今から約3700年前の遺跡である下田原貝塚がそれで、貝塚は島の北部に位置する。貝塚の周辺付近には生活に欠かすことのできない飲料水を確保できる泉水があり、泉水は日照り続きの時でも枯れることはない。貝塚は過去三回ほど発掘調査が行われたが、調査の結果、その全貌がほぼ明らかになった。貝塚からは、沖縄本島や九州などの北の文化には見られない特異な下田原式土器、骨製品、貝製品、石器などが検出されている。下田原式土器は器壁が厚く、把手付きで内彎する浅鉢で、北の土器の流れではなく、南の土器の流れといわれている^{注②}。

食料残滓は数種類ほど出土しているが、注目されるのはイノシシの骨が大量に見つかったこと。イノシシは波照間島には棲息していないが、25キロ北に離れた西表島には棲息している。また石器の材料や土器の素地は西表島産と考えられていることから、イノシシは、それらと一緒に西表島から波照間島に運び込まれたのではないかと考えられている^{注③}。

考古学、民族学、人類学を専門とする金関丈夫氏は、過去に波照間島の下田原貝塚を調査した。調査結果によると、「下田原貝塚を遺した住民の文化は、日本縄文式、弥生式、あるいは古墳時代の文化とは全然無関係である」「いま一つの特徴的石器は、少数の完全に磨成あるいは琢成された、いわゆる乳棒状の石斧である。硬質の閃緑岩あるいは片麻岩を用い、中央より上端にかけての横断面は楕円形、刃端に近い部分のそれは一面が平坦になり、やや半月形に近い」「魚骨や沈石、土錘、貝錘の存在から、この貝塚人が一面において漁撈者であったことは明らかであり、また西表島との交通の存在は歴然としているから、この住民が船を造る必要のあったものであることは明らかである」「獣骨の破片は多く、大多数は小形の猪である。猪もこの島には棲まない。西表島には小形猪がいる。石材と猪とは、西表島から搬入したものと考えられる」とする^{注④}。

金関氏は、以上の様相から「この貝塚の住民は耨耕と漁撈とを生産手段とし、船を造ることを知っていた。農耕作物は不明である。おそらく西表島の住民の支派であって、その文化は現代の波照間島の文化に続いている」「波照間島には、この貝塚の他に同系の土器、石器とともに、明代の中国陶器片を伴う遺跡が多く、これが部落内に最も多く分布している。波照間の先史文化は明らかに現代文化に続いているのである」と強調する。



下田原貝塚

さらに「下田原貝塚の成立した時代は、明代よりほど遠からぬ前のことと思われる。居住の継続は比較的短かったと考えられる」「またこの遺跡以外に、地下水の露頭と船着き場の適地を伴う、この種の先史住民の適住地を島内に求めることができないことから、この貝塚人がこの島の最初の居住者であったことが察せられる」「波照間島下田原の過去の住民は現在の島民の祖であり、西表島住民の支派であった」「その文化は耨耕漁撈を生産手段とする新石器時代の様相を呈していた」と結論づけている^{注⑤}。

金関氏は以上のようにまとめたが、果たして波照間の先史文化は現代文化とつながりがあるのか、下田原貝塚の成立した時代は明代より遠くない前のことなのか、下田原の過去の住民は現在の島民の祖であるのか、疑問は拭いされない。今後、研究の余地があろう。

下田原貝塚は前記した通り、今から約3700年前の遺跡であることは明らかである。要するに紀元前1800年の遺跡である訳だが、そうすると1368年に太祖洪武帝によって建国された明国が、1616年まで続いた事実とは相当な歴史的な開きがあり、明代より遠くない前の貝塚ではなく、随分前に人々が住み、そして遺した史跡だということになる。さらに現時点で明らかになっている下田原貝塚に続く遺跡は、4世紀頃から始まり12世紀後期までに至る無土器の遺跡である大泊浜貝塚しかないこと。波照間島の考古学的な調査が進展すれば、大泊浜貝塚より古い遺跡が発見される可能性はあるが、現在の段階で見つかっていない。

このように考えると、下田原貝塚から大泊浜貝塚に至る2200年間の波照間島は、どのような状況下にあったのか、まったく不明である。下田原貝塚を遺した人々は、その後、ど

のような運命をたどったのか、同貝塚とつながる遺跡が見つかっていないことから、明らかにすることができない。考古学上の今後の課題は、下田原貝塚から大泊浜貝塚までに流れる時間的な空白を学問的にどのようにして埋めるかにあろう。両貝塚間の歴史は、明らかになってはいないものの、連綿とした人々の日常的な営みはあったはずだからである。あるいは、そうではなく下田原貝塚から大泊浜貝塚に至る期間の島は人の住まない無人島だったのだろうか。

下田原貝塚の時代が終末を迎え、その後、限りない時間が流れて大泊浜貝塚の時代に入るが、この貝塚を遺した人々はどのような暮らしを営んでいたであろうか。沖縄県教育委員会は1983年（昭和58）に発掘調査を実施し、その後、報告書にまとめた。報告書によると、大泊浜貝塚の特徴は土器が一片も検出されないことから、無土器貝塚であること。貝塚からは須恵器壺、滑石製石鍋、褐釉陶器壺、白磁玉縁碗などが出土した。また約2・5メートル×2・0メートルの方形状の礫床住居跡が検出された。礫床内に6本の柱穴が廻り、隅には楕円形状の炉跡をもつことが分かった^{註⑥}。

大泊浜貝塚を遺した人々は、土器を使用せず暮らしていたことが、検出された遺物から明らかになったが、その人たちはいつ頃まで生活していたのだろうか。貝塚に後続する遺跡は現在のところ発見されていない。

波照間島の先史時代については下田原貝塚、大泊浜貝塚しか発見されていないうえに、さらに両貝塚は関係を保持して連綿とは続いておらず、空白期があるため明確な実像を浮かび上がらせることはできない。しかし、先史時代の島は決して無人島ではなく、人々は住んでいたであろう。八重山は14世紀末に初めて古文書に登場するが、波照間島は15世紀後期になって初めて記録に現れ、記録を読むことで当時の人々の暮らしをうかがい知ることができる。

2、古文書にみる八重山と波照間

『日本書紀』等の記録を除けば、八重山が初めて記録に姿をあらわすのは14世紀末である。つまり、1390年（洪武23）宮古、八重山の先島が沖縄本島の中山王に入貢したとする記録がそれであるが、『八重山島年来記』に「察度王御世代宮古八重山島始めて進貢」とある。また『球陽』『中山世譜』に「宮古八重山始来朝入貢」「中山前使遣使入京其使臣被風飄至彼嶋時乃二島之人見琉球行事大之禮各率い管屬之島稱臣納貢由是中山始強」、『中山世鑑』には「南夷、宮古嶋、八重山嶋、重譯、始来貢ス」「其起リヲ委ク尋レバ、大明洪武ノ始ヨリ、球國、大明へ、五年・三年ニ一度、往来有。依テ球人、難風ニ逢テ、彼二山ヘ至ル事、度々也。其ヨリシテゾ、彼二山モ、琉球ノ王國タル事ヲバ、知テケリ。依テ、慕義向風、始テ来貢ス。其後ヨリシテ、毎年ノ朝貢ニハ定リヌ」記されている。要するに先島

の中山入貢は船の漂着という偶然によって、礼節を知ることによって「南夷」の各首長が臣従して朝貢したとするのである。

八重山が中山に入貢したとする時期、各島はどのような状況下であり、どのような首長が勢力を誇示していたであろうか。これを把握できる同時代の記録はほとんどない。文献によっては「八重山群島の各島は、1389年（洪武22）までは自主独立の島であって頭目などによって治められていた平和な島であった。1390年（洪武23）中山王・察度の時に隣の宮古島の与那覇勢頭豊見親の勧めで、宮古島と一緒に服属朝貢したといわれている」という記述がある^{註⑦}。しかし、文献は具体的に頭目の名は記していない。

『球陽』等に記されている、中山入貢の捉え方については「中山の船が宮古・八重山に途中寄港ないし難風を避けて一時的に立ち寄り、あるいはまた漂着等によって、それが機縁となり、中山に入貢したとすれば、それは臣従もしくは服属関係を意味するのではなく、従って義務づけられた付庸関係に立つものでもないであろう。しばしばいわれるように、先島が朝貢したことをもって『中山始メテ強シ』とあるのは、その後ほどなくして沖縄全島を統一した中山王の威勢を示す多分に誇張的な表現とみられるのであって、むしろ、食糧薪水、交易品目等の有無相通ずるなかで、中山王の富強を知り、儀礼的経済的交易関係を維持していったものと解されるのである^{註⑧}」とする解釈が相当であろう。

『球陽』『中山世鑑』『中山世譜』は、八重山全域を総体的に記述しているが、島じまの様子を具体的に記しているのは「中山入貢」から80年余後に書かれた『李朝実録』の「成宗大王実録」巻105中の「济州島民漂流記録」である。同記録には1477年（成化13）朝鮮の济州島民が海上で遭難し、与那国島の人たちに救助され、島で約6カ月滞在した後、西表・波照間、新城、黒島、多良間、伊良部、宮古というふうには島づたいに送られ、沖縄本島での滞在を経て九州へ、そして朝鮮という順序で送り返された時の様子が記されている。この記録は、すぐれて15世紀末の島じまの姿を知ることのできる唯一の史料であるが、石垣島が出てこない。

波照間島について「济州島民漂流記録」は次のように記す。島名を「捕月老麻伊是麼」としたうえで、「其の地は平衍にして山はなく、みな沙石の地なり。周囲は所乃島（西表島：筆者注）に比して稚小なり。其の言語・飲食・衣服・居室・土風・は大概、閩伊島（与那国島：筆者注）と同しく、俺らを供饋することも亦同じきなり」と書く。そして、(1) 黍・粟・牟麦あり。水田なく稲米は所乃島に貿易す (2) 牟麦を種するは、まさに秋月なり。牛糞を用うるが、手でもって掬し田に置く。犁を用いて土を起こして之を覆う。二、三月頃のとき方に熟し刈り畢る。後、田を治して之に種す。凡そ粟を種うるも亦十月の間においてなり。種を播きて二、三月のときに収穫し訖る。復び之に種して七、八月のときにはまた収穫するなり (3) 飛禽には、鳩・黄雀・鷗あり (4) 家には、鼠あり。牛・鶏・猫を畜う。

牛を屠して食すも鶏肉を食せず (5)菜には茄子・蹲鴟・蒜・瓠あり (6)男女は耳を穿ちて小
さき青珠を貫き、また珠を串きて項に掛く (7)材木はなく、家を構えるには、みな所乃島よ
り取りて之を為す。また果木なし (8)蛇・蠅・蝸あり。その俗、蝸を煮て之を食う。余は閩
伊島と同じきなり。俺ら一朔を留りて南風を俟ち、島の人五名、俺らを將れて、一小船に
等しくのり、行くこと一昼夜にして一つの島に至る。島の名は捕刺伊是麼（新城島：筆者
注）なり、護送の人は翌日本島に還るなり、とある。

同記録には、波照間島以外のことについても記述がある。記述の内容をみると15世紀末
期における島社会共同体は、与那国島を別にして各島とも西表島と深くをかかわっている
ことが分かる。

3、14世紀後期から15世紀後期の村落と英雄の誕生

八重山は1390年（洪武23）に「中山入貢」して中山王に服属する形式をとったが、それ
以降の島じまの共同体社会はどのような状況下にあったのだろうか。村落の変遷を研究す
る考古学の見地からは、14世紀後半から16世紀初めにかけて村落に石垣を積み上げた屋敷
割りが出現すると捉える。遺跡の発掘調査から村落には道路はなく、屋敷間は通用門でむ
すばれているとみる。

石積みを巡らした石垣が屋敷囲いだとし、囲いの中に家屋が建ち、そこが寝食をともに
する家族の生活の拠点だと考えると、日常的な民衆の営みは不明だが、住民の暮らしは確
実にあった。村落では15世紀以降になって豊富な鉄文化が流入し、農耕を中心とした生産
基盤が固められて生産力が飛躍的に増大し、その中から有力者が登場して村を統括したで
あろう。

八重山の14世紀から15世紀にかけて村落については現在の時点で、記録はほとんどなく、
集落跡をうかがわせる遺跡が残っているだけだが、波照間島にはグスクあるいはスクを含
めて7カ所の村跡が往時の面影をとどめている。

下田原城跡は15世紀頃の遺跡で島の北側にあり、断崖の上に形成されている。遺構は、
崖線に沿って複数の郭を連結させ、北東方向に細長く延びる連郭式の形状をとっている。
遺跡内は石積みによって仕切られ、それぞれの郭は通用口によって結ばれている。城跡か
らは外来陶磁器や鍛冶工房の存在を示すフィゴの羽口片、鉄滓などが表面採集によって検
出されている。

伝マシュク村跡遺跡は、下田原城跡から東方の島に北海岸にあり、ごつごつとした岩肌
の岩盤の上には高さ2メートルほどのタカフクと呼ばれる石積みがある。形状から推察し
て海上から侵入してくる外敵を防備する砦のようである。村跡内は、石塁遺構が縦横に曲
がりくねって延び、随所に郭が形づくられている。郭の間は通用門で結ばれているものも

あれば完全に遮断しているものもある。遺跡からは青磁、白磁、褐釉陶器などの外来陶磁器及び壺、浅鉢などの土器も検出されている。築構された年代は、下田原城跡とほぼ同時代に相当するようである。

伝ペーミシュク村跡遺跡は、富嘉部落の南約300メートルに位置する標高30メートルの丘陵上に形成されている。遺構は楕円形に近い長方形状になっている。遺跡の規模は小さく通用口は南側に開口している。遺跡内からは白磁片及び褐釉陶器、土器片などが採集されている。伝ミシュク村跡遺跡は、富嘉部落の西方の海岸近くに形成され、石塁遺構が残っている。遺跡内には御嶽がある。この他、伝シムス村跡遺跡、伝ヤグ村遺跡、それに15世紀後半の八重山を揺り動かしたオヤケアカハチが生れたといわれる伝オヤケアカハチ生誕の地が南部落にある。

波照間島には上記のような遺跡が残っているが、遺跡にまつわる記録はなく、ただ伝説のみが古くから語り継がれているだけである。下田原城跡、伝マシュク村跡遺跡、伝ミシュク村跡遺跡、伝シムス村跡遺跡には文献史料も伝説も残っていないが、伝ペーミシュク村跡遺跡については、ペーミシュクブリャとアラブツブリャの闘いに関する物語りが残っている。

ブリャとは村の有力者を指すが、島にはブリャ同士の争いや恋物語りにかかわる伝承がいくつもある。ペーミシュクブリャとアラブツブリャの争いの話のほかに、ユナチブリャとカンチ・アザマナグの対立、クスシ・アズマグの恋愛、ピタブハメーとヤマダブハメーの霊力ある女性同士のライバル関係などである。

波照間島の歴史、文化研究に関して学者の中にはブリャを「小さな集団にまとまった家々の多くをそれぞれ支配していた地域有力者」と位置づけた上で、島の14世紀から15世紀の社会をブリャが勢力を誇示する「ブリャの時代」と定義づけ、その時代のことは記憶の伝説、また一部は神歌として残ったと捉える研究者もいる^{注⑨}。

波照間島は、地域の有力者がお互いに勢力を競っていた「ブリャの時代」だが、八重山全域を視野に入れると、当時の村落共同体社会について「14世紀後半という時期は、石器時代終末期であって、同時代、本島地方では三山分立、積極的な対明通交がみられ、八重山では未だ階級分化とよべるような充分な発達がなされていたとは思われず、恐らくそうした過渡期にあったものと解される。このことは、しかしながら、なんらかの意味で共同体社会に首長が存在していたことを否定するものではない。それがそれぞれの集落において漁撈や農耕を指導し、鉄製利器を入手し、猪垣や水利の施設をなし得た“大親”“本主”等であって、この時期そうした階層は次第に、しかも着実に勢力を扶植していき、15世紀末ごろにはそれぞれの地域にあらわれるいわば“英雄”の前身をなすものであったとみるべきであろう」との見解がある^{注⑩}。

15世紀後期の波照間島については琉球王府が成立する中で、王府と同盟を結んだ少数の有力者がブリヤの残された権力を取り上げ、「ブリヤの時代」が終わったとされる。有力者の中には同盟関係を結ばず、遺跡から出土する外来陶磁器から判断して、海外との交易で経済力を貯え次第に勢力を伸張させた有力者もいたはずである。

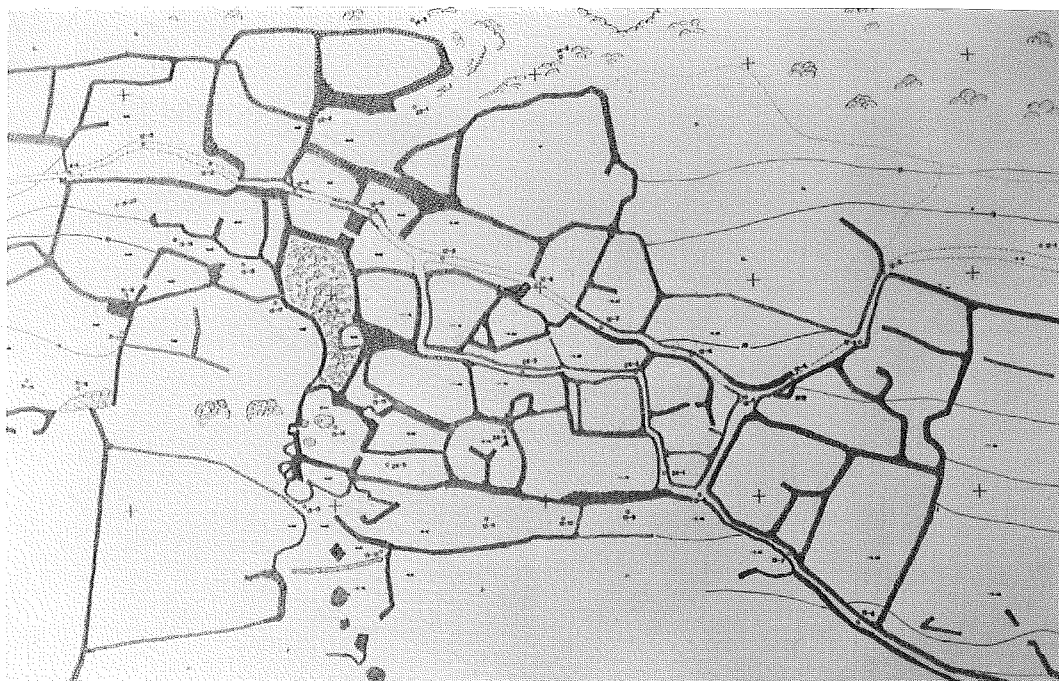
島の狭い地域に勢力を誇るブリヤたちが淘汰されて、頭角を現わしてきたのが波照間島で誕生したといわれるオヤケアカハチ、明宇底獅子嘉殿、長田大主などであったのだろう。明宇底獅子嘉殿は波照間島にとどまったが、残る二人は石垣島に活躍の拠点を移した。波照間島以外では石垣島の北部を支配下に入れた平久保加那按司、西部の川平を拠点にした仲間満慶英極、西表島西部で勢力を誇る慶来慶田城用緒、与那国島のサンアイ・イソバがおり、それぞれ民衆を従えて勢力を扶植していた。

琉球王府は第二尚氏王統の第三代・尚真王の時代になると、統一政治の基盤が固められた。尚真は1477年（成化13）に即位した後、位階制度及び職制の大転換を断行するとともに、神女組織の確立を図った。さらに海外交易も推進して様々な文化を受容し、国家財政を潤した。琉球王国は階級国家として段階的に成長していき、強大な武力を背景に中央集権体制を構築した。

琉球王府を核とする強力な国家体制が築かれる中で、王府の権力は八重山にも波及した。国家権力の伸張によって、八重山の社会は王府の一区域に組み込まれることとなるが、当時の八重山は沖縄諸島の中でも最も後進地域であったらしく、「八重山の神代は第15世紀の終わり、（中略）神々の東雲であった^{註⑩}」とする見方もある。民衆の生活は『済州島民漂流記録』に記された波照間島から得られる報告によると、王府の繁栄からは想像できないほど粗野であったことが分かる。社会システム論の観点からは『済州島民漂流記録』の時代は「総じてこの時期の八重山社会は、島々のそれぞれの立地条件の制約のなかで、低い生産活動を行いながらも、鉄器の普及にともない、それを積極的に原始的共同体社会の政治的、経済的な統轄の上に利用させながら強力は共同体首長を出現させていく時期であったとみられている^{註⑪}」と説く研究者もいる。

八重山の15世紀中期から始まる社会は「群雄割拠の時代」で別名「英雄の時代」とも称される。「中国の技術と器具、ことに鉄器が入って、今まで住めなかったところに住みつくことができた。その舶来の鉄を利用して、征服しあるいは撫民したものが初代の英雄であったので、石器時代の終末期から約一世紀の生産昂揚期があって、やがて英雄時代につづいたのが、八重山の歴史であっただろう。その背後には、こうした地理上、文化交渉上の特殊事情があったわけで、大和では4、5世紀ころに起こったと思われるようなことが、ここでは約10世紀もおくれて起こっているのである^{註⑫}」との推測を交えた見解がある。

八重山の「英雄時代」は1500年（弘治13）の「オヤケアカハチの乱」、1522年（嘉靖1）



伝マシュク村跡縄張図



下田原城跡縄張図



海岸近くに積まれた伝マシュク村跡遺跡の石垣



下田原城跡の石積み

の仲宗根豊見親玄雅による与那国島の鬼虎征伐でもって幕を閉じる。かくしてアカハチの乱後、琉球王府の八重山統治に対する厳しい監視が続き、1542年（嘉靖21）には八重山蔵元が竹富島に創設され、島じまは琉球王府の厳然たる支配下に置かれた。

4、歴史を動かした島の英雄たち

八重山「英雄時代」は、別名「群雄割拠の時代」とも称されることは、前述したとおり各村でそれぞれ勢力を誇示し、お互いに競っていたとされるが、そこで「英雄」あるいは「群雄」をどのように把握すればよいのだろうか。「群雄」は原始共同体社会の族長というべきもので、共同体間の支配権をめぐる抗争を行いながら自らの勢力を扶植しつつあったであろうことが想定される。幸か不幸か、未だ外部から深刻な影響を受けることなく、八重山の島々の間においてのみ、換言すれば、孤立せる小宇宙（島社会）のなかで、ようやく歴史的なステップを一步ずつ歩みつづけていたということである。それが宮古・沖縄という“外部”の力によって激しく揺り動かされていったのであった^{注④}とされる。

英雄を上記のように捉えるならば、波照間島には島で生れ、島を拠点に勢力を貯えていたゲートウ・ホーラ、明宇底獅子嘉殿、ウヤマシ・アガダナ、それに波照間島を出自とし成長した後、島を離れ石垣島に渡って実力つけ、琉球王府や宮古島の英雄とも絡み合っただ立したオヤケアカハチ、長田大主は程度の差こそあれ、英雄と呼んでもいいだろう。

(1) ゲートウ・ホーラ

古琉球期の古文書史料には、まったく記録はないが、島には彼にまつわる伝説が残る。彼は並はずれた身体と超人的な力を持つ英雄と記憶されている。彼の信じがたい力には多くの物語がある。彼はいくつもの大岩を動かし、20俵の米俵を抱えて運び大きな帆船の帆柱を動かし、太い竹を帯のように腰に巻き、太い家柱を引き抜いたのでずる賢い敵対する者も彼にはかなわなかったという。

彼の出生については、次のような伝説がある。これは彼の並はずれ力がどのようにしてできたかを物語るものでもある。ある日、オランダの船が上地島と下地島の西端のリーフに乗り上げた。船の乗組員は助けられ、しばらく両島で暮らした。たまたま島を訪れていたゲートウの娘が一人の船員と恋仲になり、男の子を出産した。この時、産まれたのがゲートウ・ホーラであった。彼の出生については、父親がヨーロッパ人であるという、外の世界からの異国的要素が影響を及ぼし、彼に巨大な身体と力を与えたことになっている。彼が参加した力試しは、多くの場合ヤマトンチューや中国人が接触する設定の場で行われたという。

彼は八重山の「英雄時代」が始まる1450年（景泰1）頃に産まれたといわれる。

しかし、死亡年は明白ではない。彼の子孫は加屋本家の人々で、加屋本家は屋号をゲ



ゲートウ・ホーラの墓

ートゥという。彼の石積み墓は、北部落と南部落の東方約200メートルのサトウキビ畑の中にある。通常の墓と異なるのは、墓の向きが北西ではなく、東であること。これには彼のような英雄が二度とゲートゥ家に産まれてこないことを願って、彼に敵対した人たちが意図的に正しい向きではない、東向きにして造ったという伝説が残っている。

(2) 長田大主（ナータ・フーズ）

宮古島全域を支配した仲宗根豊見親玄雅が部下を率いて、与那国島の軍事的遠征に乗り出した時に訪れた波照間島で、島の娘に産ませた落とし種といわれる。『八重山島年来記』に「景泰七丙子 長栄氏元祖長多大父童名まよかま生年」との記述があることから、1456年に産まれたことが分かる。伝承によると、母親は前野（メーニ）家の娘ナビヤー。幼少の頃はメーニ・マツツァーと呼ばれて少年期を過ごした。幼い頃には後になって対立するオヤケアカハチは遊び友だちだった。彼は成長して石垣島に渡り、石垣地区を支配下に置き、群雄割拠時代の八重山で重要な役割を果たすようになった。

波照間島には前部落の一角に彼の靈魂を祀った長田御嶽があるが、そこは大主が幼少の頃仲宗根豊見親玄雅の家臣に伴われて島を旅立った日、母親のナビヤーがわが子の大成を念じて祈願した場所といわれる。島の港の近くにあるマドゥマリ（真泊）の浜は大主と母親の訣別の地と伝わる。母親はマドゥマリの神に航海安全を祈った後8



長田御嶽のイビ

歳になった大主に「おまえは身分の高い士族の子だ。今日限りでこの母を忘れ、父親の許で修業し、一日も早く偉い人になるように。そして二度とこの島に戻ってはいけない。この母もこの世で二度と会うことはないでしょう」と別れの言葉を送ったという。

大主の妹に真乙姥（メーツバ）と古乙姥（クイツバ）の二人がいるが、この二人も仲宗根豊見親玄雅の私生児として、前部落の前津（メーツィ）家と越地（クイチィ）家で産まれたといわれる。二人は私生児ながらも後になって、一定の政治的役割を演じる運命を背負わされていた。オヤケアカハチの乱が二人の運命を決定づけた。

石垣島に渡った大主は、オヤケアカハチが琉球王府に反抗的な姿勢を表すなかで、王府よりの態度を示す大主は、身の危険を感じアカハチが逃れるため西表島東部の古見に身を潜めた。その後、琉球王府がアカハチ討伐に乗り出すと、大主は古見から出て王府軍に協力した。そして乱後は、古見首里大屋子に任じられ、八重山の頭職第一号となった。

長田大主に関しては、いくつかの疑問点が指摘されているが、集約すると父親とされる仲宗根豊見親玄雅の与那国島の制圧と、大主の出生との間に不整合があること。大主が1456年に出生したことが正しいとするならば、1475年（成化11）に仲宗根豊見親玄雅が波照間島に立ち寄り、その時、島の娘との間に産まれたのが大主であるとする見解、1522年（嘉靖1）に仲宗根豊見親玄雅が与那国島の鬼虎を征伐し、その前

後に波照間島に立ち寄り、そして大主が産まれたとする見解に疑問が生じる。さらに仲宗根豊見親玄雅が1457年（天順1）に産まれたとする見解もあるが、そうになると豊見親は大主より1歳年下という矛盾がある。

『八重山島年来記』によると、大主は1517年に死亡している。同記に「正徳十二丁丑 長多大父石垣親雲上死去六十二」とある。

(3) オヤケアカハチ

長田大主と同世代の人物といわれるが、出生は明らかではない。ただ「野生ノ豪侠児不遇ノ『オヤケ、アカハチ』生ル。容貌魁偉、頭髮赤緒、長ク垂レ、齒ハ己ニ成人ノ如ク生イ眼光人ヲ射殺。産婦其ノ怪惡ノ形状ニ驚キ哺乳養育スルに忍ビズ、他聞ヲ憚リ裙袴（湯巻）ニ包ミ、夜初更窈カニ海中岩礁ニ捨テ去ル。生児ハ涛ノ堂々轟々壯烈ナル波ノ響、波シブキヲ真額ニ浴ビツ、熟睡セリ、天明ケ漁舟岩礁ニ生児ヲ認メ收拾シテ育テリ^{註⑧}」との記録があるが、伝説の域を越えていない。ゲートウ・ホーラの出生や風貌から推察すると、ヨーロッパ人の血が流れているようである。

島の伝承によると、アカハチは髪が赤く、鬼子の特徴が備わっていたので、島の東部にある断崖が続く岩場に捨てられていたという。しかし、その後、今の南部落に住む人に助けられて育てられたといわれる。その場所は現在、「オヤケアカハチ生誕の地」として町指定の史跡文化財になっている。

島の古老の話をまとめると、アカハチは長田大主よりも体が大きく力が強かったこと。二人が相撲をとった場所が島の南側の海浜であったこと。彼は17年間から18年間ほど島で生活した後、石垣島の南東部にある大浜に移り住んだことなどが分かる。

アカハチは石垣島に移住すると、八重山の英雄たちと戦い、民衆を従えて勢力を伸張、琉球王府に対抗するようになった。1500年（弘治13）には琉球王府軍と仲宗根豊見親軍に討伐されて死亡した。アカハチが琉球王府に討伐された要因について、従来、「島民が信仰していた火食の神・イリキヤアマリを禁止という宗教上の理由」「王府の課した重税に対する反抗」などが挙げられていたが、近年、「八重山における貿易権を奪取するとともに、王府が南方諸国との貿易を行っていたなかであって、それらの国々との接点をなす八重山を手中に収めることにより、その貿易権の集中、独占化に終止符を打った^{註⑨}」との財政的理由を示す見解があり、有力視されている。

アカハチに関する史料は、王府側の古文書が数点ほど残っている。『球陽』『琉球国由来記』『琉球国旧記』『中山世鑑』『中山世譜』『八重山島年来記』などだが、王府の“善玉論”、アカハチの“悪玉論”で塗り固められている。『琉球国由来記』巻21には「當嶋、洪武年間、為御本國轄地。毎年貢物献上、渡海イタシケルニ、其後、大濱村ニ、ヲヤケ赤蜂・ホンカワラトテ二人居ケルガ、極驕、有叛逆之心、貢物到中絶ケル」な



オヤケアカハチ誕生の地といわれる場所

どとあり『中山世譜』巻6には「先是。宮古島・八重山。自洪武年間以来。毎歳入貢往来不絶。奈八重山酋長。有掘川原赤峰者。心変謀叛。両三年間。絶貢不朝。時宮古島酋長。有仲宗根豊見屋者。與赤峰不睦。赤峰將攻宮古。二島騒動」などと記す。別の古文書もほぼ同じ内容になっている。

八重山では古い時代からオヤケアカハチ研究が盛んだが、研究史をひも解くと注目されるのが「アカハチ二人説」と「アカハチ一人説」の対立があること。これは古文書に「ヲヤケ赤峰・ホンカワラトテ二人居ケル…」と載っていることが、大きな要因だが、オヤケアカハチ・ホンカワラの語句を解明するなかから「アカハチ一人説」が大勢を占めている。

オヤケアカハチは古代の英雄として、伊波南哲が長編叙事詩「オヤケアカハチ」にまとめている。波照間島では「アカブザ」と卑下して呼ばれていた時もあった。大浜では村の英雄として慰霊祭が行われている。大浜地区の集落の西方に国指定史跡・フルスト原遺跡がある。遺跡は下田原城跡と同じように石塁遺構が残っているが、規模は下田原城跡より大きい。オヤケアカハチの居城だったであろうとの見方ある。

(4) 明宇底獅子嘉殿（ミウスクシカドン）

琉球王府の記した古文書によると獅子嘉殿は、オヤケアカハチの乱に際して王府に忠誠を誓い、アカハチの要請に従わなかったこともあり、アカハチの手下に殺害された。彼の誕生年及び死亡年は明らかではないが、出生から死亡に至る過程は王府側の

公的史料に記録されている。『球陽』『琉球国旧記』『琉球国由来記』に、その記録がある。

彼の足跡を記した『球陽』の口語訳には「八重山波照間島に一夫婦有り、夫は明宇底於と日ひ、婦名は也那志と日ふ。一男を産下し、名づけて明宇底獅子嘉殿と日ふ。此の人、性質篤実にして心操忠義なり。敢へて妄りには行はず。此の時、赤蜂等、中山に謀叛し、急ぎ檄文を各処に発し、衆民を聚会して日く、中山の大兵、来りて我が境を侵さんとす。汝等、能く鋭気を奮ひ速に出でて迎戦せよ。若し人、令に違ひて怠惰すれば、法に依りて立ちどころに斬り、敢へて寛饒せずと。独り獅子嘉殿のみ克く忠誠を守りて赤蜂等に従はず。而して其の難を逃去して波照間山に隠居す。赤蜂、平得村の嵩茶・大浜村の黒勢等を遣はし、急ぎ獅子嘉殿を招かしむ。嵩茶、起程する時に当り、赤蜂再三之れに囑して日く、獅子嘉は屢次之れを招けども未だ肯へて聴従せず。想ふに必ずや其の故有らん。汝、親しく波照間へ去き、宜しく以て慰諭すべしと。嵩茶等、令を奉じ、往きて他の島に至る。時に、獅子嘉、適々海辺に在りて、竿を垂れ魚を釣りて逃匿する能はず。嵩茶、計を設け言を極め、従容として招撫するも、獅子嘉、志に忠貞を矢ひ曾て聴服せず。嵩茶、遂に獅子嘉を擒へ、往きて小浜に抵り剣を抜きて刺殺し、以て海中に投ず。嵩茶の船、将に石垣に至らんとす。時に、偶々中山の官軍赤蜂等を征討して其の党族悉く皆投誠するに値ふ。島中の人民、将に獅子嘉の節を守りて死する事を以て、僉、呈文を具し、之れを中山奏す。中山、深く、憐恤を加へ、哀みて祭奠を賜ふ。(以下後略)」と記す。王府側の史料をみると、獅子嘉殿は悲劇の英雄として奉られており、赤蜂の記述とは雲泥の差がある。

獅子嘉殿は波照間島を活動拠点とした英雄であることが分かるが、果たして彼の居住地は島のどこにあったのだろうか。北部落の北側に美底御嶽があるが、「ミシユクワ（美底御嶽）の片隅にある場所及び、そのすぐ西の敷地には古い石垣の名残があるが、これはかつてミユシクシシカドンという地元支配者の住居で、今は宗教的にタバルトントとして拝まれる場所を囲んでいたものといわれている^{註⑩}」とする“美底御嶽居住説”と、現在の富嘉部落の西方にある伝ヤグ村跡遺跡に注目し「ヤグ村旧跡はミシユク浜から南に当り約四、五町許急坂を上った海岸丘陵地上にあって七、八個所の屋敷跡があり、その中央部にヤク井と称する泉があって、周囲は石垣で囲ふてある。このヤク井の後方（北に当る）にある屋敷跡は最も大きく中央には小さな拝所があってミシユク獅子嘉殿の屋敷址であると言ひ伝えている^{註⑪}」とする“伝ヤグ村跡遺跡居住説”の二つ見方がある。

獅子嘉殿の死亡後、琉球王府は彼の三男、三女の息子と娘を王府に招致し、忠節を褒賞した。そして長男・赤真屋を屋安古与人、次男・古真屋を新本与人、三男・遠戸



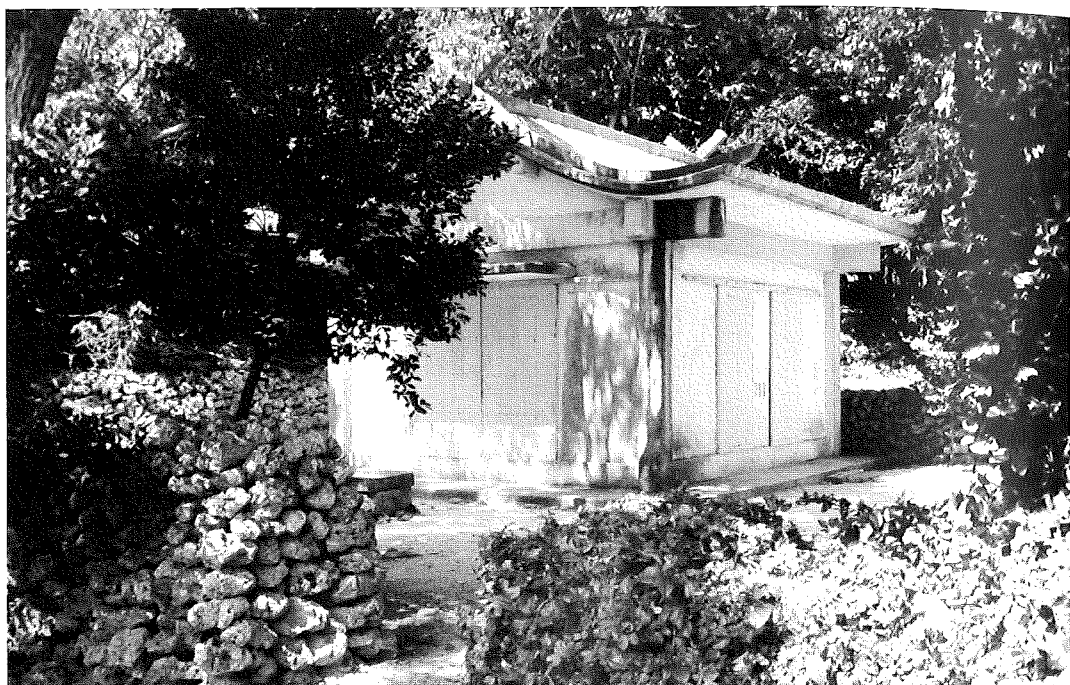
美底御嶽のイビ

を還宝（カイシムル）与人、三人の娘の嘉真太、保古屋、古也を女頭（ブナジィ）に任じた。島のピテヌワー（野原の御嶽）で知られる真徳利御嶽（マートゥルワー）、白郎原御嶽（シィサルワー）、阿幸俣御嶽（アバティワー）は、三人の息子たちが創建し崇拝を始めた場所といわれる。

(5) ウヤマシ・アガダナ

宮古島の仲宗根豊見親玄雅は、与那国島を討伐する時、波照間島を自軍の食糧調達と補充兵徴集のための中継基地にしたといわれる。アガダナは、かつて現在の波照間中学校付近及び中学校から北方に広がる一帯に形成されていた、ナーシヌムラの首長だったといわれるが、豊見親から与那国討伐への参加を求められ、その説得に応じ与那国島に渡った。アガダナの加わった遠征軍は、与那国島で島民を虐殺するなど悪逆無道を繰り返して悪行の限りを尽くし、島に帰還して来た。

島に残る伝承によると、彼が島に戻ってしばらくたったある夜のこと。海辺で魚釣りをしていると、突然、何百という悪霊の魂（マザムヌ）が青白く海上に浮かんでいるのを見た。それは与那国島で殺された人たちの怨霊であり、西の海から島に近づいて来た。彼は恐怖にかられて家に走り帰り、その様子を人々に知らせ、自分はユナビヤ（夜業する場所）の網の下に隠れて息を殺しじっと耐えていた。怨霊は島に上陸したが、網の中にいるアガダナには近づくことができなかった。そこで怨霊は、村の人々に怒りを向け、そこで村人は悉く目玉を繰り抜かれるという残虐なやり方で殺さ



大底御嶽

れた。アガダナは、後になって命が救われた、ユナビヤの地に大底御嶽（ブスクワー）を建立した。

大底御嶽は、南部落と前部落の間に建っている。御嶽はピテヌワーのひとつである阿幸侯御嶽の遥拝御嶽として神行事が行われている。阿幸侯御嶽に仕える祭事には、先に阿幸侯に行き、そして神を大底御嶽に招請して神行事が行われる。

別の伝説によれば豊見親は、アガダナの家に宿泊したが、豊見親が島に来たのは与那国討伐の以前というより、討伐が成功した後に来たのであった。豊見親は島で休息をとった後、石垣島や宮古島に向かう前に船を修理させたともいわれる。

アガダナの居住地について、研究者の中にはアガダナはナーシヌムラに来る前は下田原城跡に住んでいた、と唱える人もいる。さらにナーシヌムラに移り住んだ後でも、南中国や南洋方面に遠征したともいわれる。アガダナの子孫は前部落の親盛（ウヤマシ）家で、同家には南方方面の島々と関係したとみられる木製の鼓筒がある。

5、倭寇と島の英雄たち

古琉球期の琉球王府や明王朝の残した古文書から、14世紀から16世紀の琉球は大交易時代といわれ、中国や日本本土、東南アジアの諸国と海外貿易を繰り広げていたといわれる。交易活動は王府の認定した官営貿易に限らず、民間商人による密貿易も行われており、明朝はこれらを取り締まるため、冊封体制を敷き海禁政策を導入した。民間による密貿易あ

るいは私貿易は、厳禁されていたにもかかわらず、王府の目を盗んで行われており、この密貿易の主役を演じたのが倭寇の集団だったといわれる。

八重山の英雄時代以前及び英雄時代と符号する14世紀から15世紀の遺跡から外来陶磁器等が多量に出土している。これは一体何を物語るのだろうか。「沖縄本島だけでなく、宮古・八重山地域の多くの遺跡から、おびただしい数の中国陶磁器片が出土している。かかる考古学的事実は、その基礎に琉球諸島の各地で『私貿易』が広く展開していたという状況を想定しなければ到底説明がつかない^{註⑩}」と説かれる。

琉球王府や明朝の認めない密貿易あるいは私貿易の中心的役割を担っていたという倭寇集団は、単純に海域を荒し回る海上暴力集団というだけでなく、一面、海の貿易商人（海商）としての要素も持っていたようだ。倭寇ついて「みんな倭寇を海のギャングみたいに考えていますけれども、決してそんな単純なものではなくて、彼らは和戦両様の構えで、平和と戦争を使い分けていたグループですからね。そういった人間が南西諸島の一角にとりついたらと考えてもおかしくない」「琉球とヤマトの貿易ルート、海運は基本的には倭寇の手中にあったのじゃないかと思うんです。琉球王国としては、倭寇と事を構え敵対するのじゃなく、むしろ協調的に彼らのルートを使ったのじゃないでしょうか」「倭寇は私貿易船ですから、うまくいかないと暴力沙汰になりますけれども、本来は商人的存在なんですね^{註⑪}」と見方もある。

大交易時代の実相を明らかにするには「公貿易」だけの視点ではなく、「密貿易」をも包括した観点が必要であり、そうすることで古琉球期に展開された海外貿易の歴史像を浮き彫りにすることができよう。近年、国境という制度的な枠組みや既成概念を越えた次元から「倭寇的世界」という概念を導入して歴史事象を明らかにしようという研究がある。倭寇は前期（14世紀～15世紀）倭寇と、後期（16世紀）倭寇に時代区分できるが、それぞれ担い手や活動等に特色の違いがみられる。中国人が主体の後期倭寇が芽を出す、15世紀中期には明朝が安定期に入るため、倭寇集団は中国沿岸には行き場がなくて、東シナ海を跳梁していたといわれる。当然にそうなると、南西諸島方面にも出没した可能性は拭いされず、八重山近海にも姿をみせたであろうことは想像できる。

倭寇は地域の文化形成に大きなインパクトを与えたといわれるが、八重山の英雄時代に包含される遺跡から中国製陶磁器等が出土しているということは、遺跡は海外交易の痕跡をどどめおり、だれかの居住地だったことが分かる。しかし、遺跡から出土した外来陶磁器等で、居住していた人物を特定することは難しい。何しろ住んでいた人物を裏づける“モノ”が発見されていないため、明確にすることはできない。遺跡から検出されている陶磁器類は、「公貿易」の交易品ではなく、「私貿易」で取引された品物であろう。

八重山の「英雄時代」の周辺海域には、明国から海禁を犯して遠路はるばる一獲千金を

夢見て島じまに密貿易にやってきた中国商人が船を並べていたと考えられる。そして海商らは、ほとんど後期倭寇の一団であったのであろう。島じまの海外交易で問題となるのは、中国商人は陶磁器類を貿易品として持ち込んだが、八重山の島民は中国商人に対して何を取り引き品として扱ったのだろうか。史料がないため明示することはできない。

稲村賢敷氏は島じまに残る史跡に焦点を当てて倭寇研究の業績を残しているが、波照間島に関して「波照間島を中心とする航路は中山王朝から支那の福州に至る朝貢、貿易船の航路に対して裏道航路に当り、明琉両政府の管視からはずれているために当時の密貿易船及海寇船は多く此の航路を通ったものと思はれる。こうした関係で波照間島には早くから大和人の居住地が出来て文化も他の諸島より早く開け八重山の歴史は波照間島から先に開けたようである」とみる。

稲村氏は、倭寇史跡については伝ヤグ村跡遺跡、下田原城跡、伝シムス村遺跡の三カ所を挙げている。これらの三史跡に共通しているのは、いずれも外来陶磁器の青磁、褐釉陶器類が遺跡から出土していること。そして史跡とかかわりの深い英雄は、伝ヤグ村跡が明宇底獅子嘉殿、下田原城跡がウヤマシ・アガダナとし、伝シムス村跡は桃盛（トニ）家が中心的な役割を果たしていたとみている。しかし、倭寇史跡は上記の三史跡だけにとどまらず、伝シムス村跡の西方に広がる伝マシユク村跡、島の西側にある伝ミシユク村跡も加えてもよいだろう。これらの遺跡からは倭寇との関係を裏づける外来陶磁器が出土している。

倭寇との関連を視野に入れた時、遺跡の構造で注目されるのは下田原城跡と伝マシユク村跡遺跡の二つ。下田原城跡は、南側は平坦だが、北側は約10メートルほどの断崖が東西に延びる。そして東側と西側は緩やかな勾配をなしている。城跡は島の北側にあり、北方を向くと海が広がり、遠くに西表島や石垣島の山並を眺望できる。城跡は立地条件や形状からして、海上から侵入して来る外敵に備えて構築されているようにみえる。伝マシユク村遺跡は海岸線近くの岩場に高さ約2メートル、延長約100メートルの石垣を東西に積み上げてある。石垣をみると砦のようであり、下田原城跡と同様、外敵を防備するために築き上げられたようである。

史跡構造からみて、この外敵とは何者であるのか。推測の域を越えないが、見方によっては倭寇であったことも考えられる。出土している外来陶磁器から推して、倭寇の集団は史跡を訪問し、村落の首長と取り引きをしたであろうか。そこで次に考えられるのは、両史跡に居住していた人物は、それなりに勢力を誇っていたと思われるが、何者であるのかということ。人物の特定化は、出土した陶磁器からは判断することは難しい。八重山の英雄時代の史跡が、島には数カ所残っており、これらの史跡は倭寇と何らの関係を保持していたと考えられる。

おわりに

八重山諸島の南端にあって「波照間島節」には「下八重山」と謡われる波照間島だが、八重山の先史時代から群雄割拠時代においては、西表島と同様、極めて“重要な島”であり続けた。下田原貝塚は、島じまの先史時代を解明する史跡として最も古く、そこから出土した下田原式土器は祖型が台湾東海岸の巨石文化との文化伝播によるものとする見解のほか、マリアナ諸島のマリアナ赤色土器との類縁性を説く見方がある。いずれにせよ、独特な型式をしているが、八重山では最古の土器であることは間違いない。

八重山の群雄割拠時代は、琉球王府の権力基盤が固まりするある時期で、王府の支配力はそれなりに八重山に影響を及ぼしていたものの、ある種の独自性も保っていた。そのような時代に島じまには英雄がいて民衆を統括していたが、そのなかで時代の中心的役割を果たし、歴史を推進していた人物の大半は波照間島出身なのである。

石垣島や西表島に比べ周囲が14キロメートル余しかない小さな島から、なぜ、八重山の歴史を動かすような人物が輩出したのであろうか。波照間島は西表島、石垣島、宮古、沖縄本島、日本本土という地理的に北上する「北向きの視線」では南端に位置するが、台湾、東南アジア、いわゆる南洋諸島を視野に入れた「南向きの視線」では日本の最先端にあり様々な南方文化が入り込む玄関口にある。島の周囲を黒潮という“海の大河”が北上しており、黒潮の流れによって南方から多種多様な文物や文化が入り込んできた。

外部から入ってきた文物や文化のなかには倭寇のような海賊的な要素をもちながらも、海商として活動した人的集団、あるいは島人と交流のあったヨーロッパ人等も含んで考えると、小さな島は何らかの文化的衝撃を受けざるをえなかった。このようなインパクトはマイナス要素よりも、プラス要素の方が強く、島の文化向上に少なからず影響を与えたであろう。周囲を荒波が洗う島への文化の流入が長年に渡り続くことで、英雄を生み出す素地が形成され、時代を重ねることによって次第に強固になっていったものと考えられる。そして、これが英雄を輩出することに結びついたのであろう。

注

- ① 稲村賢敷『琉球諸島における倭寇史跡の研究』（1957年）
- ② 沖縄県教育委員会『下田原貝塚・大泊浜貝塚』（1986年）
- ③ 沖縄県教育委員会『前掲書』
- ④ 金関丈夫「八重山諸島の古代文化」（『民族学研究』第19巻2号 1955年）
- ⑤ 金関丈夫「前掲論文」
- ⑥ 沖縄県教育委員会『前掲書』
- ⑦ 八重山歴史編集委員会『八重山歴史』（1954年）

- ⑧ 宮良高弘編『八重山の社会と文化』(1973年)
- ⑨ C・OUWEHAND『HATERUMA』(1985年)
- ⑩ 宮良高弘編『前掲書』
- ⑪ 柳田国男『海南小記』(1925年)
- ⑫ 宮良高弘編『前掲書』
- ⑬ 金関丈夫「前掲論文」
- ⑭ 宮良高弘編『前掲書』
- ⑮ 岩崎卓爾「ひるぎの一葉」(『岩崎卓爾一卷全集』1974年)
- ⑯ 黒島為一「貿易権の独占化と八重山征伐」(『琉球新報』落ち穂 1984年 1月11日)
- ⑰ C・OUWEHAND『前掲書』
- ⑱ 稲村賢敷『前掲書』
- ⑲ 真栄平房昭「琉球の形成と東アジア」(新版『古代の日本③』九州・沖縄 1991年)
- ⑳ 谷川建一編『沖縄・奄美と日本』(1986年)
- ㉑ 稲村賢敷『前掲書』